

現場からの教育リレーフォーラム in 臼杵 概要記録

1. 開会あいさつ 後藤國利（臼杵市長）

- ・今日は暑い中たくさんの方にお集まりいただき、フォーラムが開催できることに感謝申し上げます。
- ・提言・実践首長会では、いろいろな省庁の方と一緒に政策提言を考えているが、これから先の教育がいかにあるべきかを考えるフォーラムをリレー式で開催することになった。
- ・長い経済成長の時代が終わり大変な時代になった。今こそ教育が重要である。経済繁栄の時代の中で、一番傷ついたが教育ではないか。今日は各方面からいろいろな意見を出していただきたい。



2. 問題提起

(1) 教育政策の展望……………布村幸彦（文部科学省大臣官房審議官）

- ・教育について熱く議論されていることに感謝申し上げます。学校のみならず、幅広い分野の方からの意見を伺えることをありがたく思う。活力ある議論をする首長がいることは心強い。
- ・スクールミーティングなど、学校に伺って、先生、PTA、生徒などから意見を聞いている。文部科学省が一方的に制度を改革するのではなく、現場を知って、先生とともに考えて行きたい。
- ・全国学力テストを実施したい。国語と算数、国語と数学の2教科の学力を測る。日本の子どもの学力の現状を把握するためであるが、現場の方々には、全国での比較の中で、強いところ弱いところを見つけ出して、実践に活用してもらいたい。秋には結果をお返ししたいと考えている。
- ・アンケートで子どもの現状を調べたい。食事や生活習慣、学級規模についても少人数学校の成果を客観的に調べる。40年前のように、学校間の競争にならないように気をつけて進めて行きたい。
- ・教育基本法は、これまで一度も改正されていない。一定の成果をあげてきたと自負しているが、これからの100年、200年先の教育を考えたとき、何に重きをおくかを考え直したい。
- ・教育の目標に、知育、徳育、体力とともに、社会性・公共性を書き加えている。人格の完成と社会貢献として何ができるかを大事にした、バランスよい教育の理念を打ちたてて行きたい。
- ・新たに「生涯学習」や「家庭教育」の条項が加わっている。生涯学習は制定時にはなかった言葉である。
- ・地域教育については、地域とは誰なのか不明確な面があり、「学校、家庭、地域住民等との相互の連携と協力」として書き込んだ。
- ・宗教教育に関しては、「宗教に関する一般的な教養」という一文を加えている。
- ・学習指導要領は国が定めたもの。詰め込み教育の反省から、「ゆとり」という言葉が使われてきた。それが「緩み」という捉えられ方をされている。時間的ゆとりの中で、出来なかった子どもには丁寧な学習を、出来る子にはより発展的な学習を、さらに横断的な総合的学習で、理解を深めてもらうことがねらいである。
- ・ 今後、より具体的な到達目標を出来るだけ明らかにしていく。基礎基本の国語に注力したい。
- ・ 子どもの体験の機会を多く設けていく。例えば、土日に地域の方の協力を頂き、職場体験を行うとか、伝統文化の継承や宗教の理解の中での実践に結びつける、など。
- ・ 計画案を固めた上で、皆さんの意見をいただきながら進めていきたい。

(2) 教育改革と首長の役割……………穂坂邦夫（前志木市長）

- ・教育は引き出すこと。教えるのであれば硬直化した制度でいいが、子どものいいところを引き出すためには現場の創意や工夫が必要である。国の無償制による機会均等は必要であり、国庫負担は不可欠であるが、2分の1から3分の1になった。お金は偏在する。大都市に金は集まる。地方の中で差が出ては困る。お金をしっかり持ってほしい。
- ・市町村、教委、学校の縦型社会は硬直化しているが、現場が創造性を発揮している。環境づくりは国の責任である。
- ・子どもの能力をどう引き出すか。勉強だけではない、学校だけでは教育は足りない。家庭も地域も行政も一緒になって行う。
- ・「教育委員会廃止論」という本を書いた。現行制度でもいいが、より良くするにはどうするか。
- ・レイマンコントロールが重要である。例えば、特別支援教育を行うには様々な人が必要であるが、教育委員が5人枠では入れられない。教育委員会の設置規定を変えて、地域の多様な意見が教育行政に反映できるよ

うにすることが課題である。教育委員会には、傍聴がほとんど来ない。

- ・ 大学は知識の切り売りをするればいいが、小中学校はその子どもをどうするかというたいへんな役目を担っている。文部科学省と学校の間には、県教委があり、市町村教委がある。もっと分かりやすい制度にする必要がある。
- ・ 教育の責任者は誰なのか？教育委員会？市長は？小中学校をこれだけ持っているのに、責任者があいまい。市町村首長が総括責任者であるべき。首長は金を握っているが、教育現場の識見は持たない。総括責任として条例で規定していいのではないか。
- ・ 「オラが学校にしたい」といっても、県知事はいわば派遣会社の会長であり、教員は派遣社員であるため「オラが先生」にはならない。教員の質が保てない県費負担教職員制度を廃止すべきである。
- ・ 障害を持つ児童は、幼稚園までは仲間なのに小学校から別々になってしまう。視覚障害者は盲学校、聴覚障害者は聾学校、最初から分けることはいかがなものかと思う。

(3) 臼杵市の教育の取り組み……吉田純雄（臼杵市教育委員会教育長）

- ・ 臼杵市と野津町が合併して新しい臼杵市ができた。人口 44911 人、面積 291k m²。産業は、造船、醸造、水産業、など。
- ・ 小学校が 19 校あるが、1 学年 2 学級は 2 校のみ。児童数の減少が深刻であり、10 年間で 902 人も減っている。平成 23 年は 1,619 人の見込みである。特に野津地域は少子化の傾向が顕著である。
- ・ 平成 15 年に少子化対応の検討委員会から最終答申が出され、学校区を再編成する提案が出ている。
- ・ 複式学級のある学校が 8 校となり、学校の教育力の低下が問題になっている。子どもの学力、集団による社会性や人間性、部活動による体力向上など、学校の教育力は限界に来ている。学校の適正規模・適正配置は不可避となっている。
- ・ 臼杵市の基礎・基本の定着状況調査を大分県と連動して行っているが、学力テストの偏差値で県と格差が出ている。状況を分析し、実態の応じた手だてを講じている。
- ・ 臼杵市教育力向上推進委員会を設置し、臼杵市教育力向上、幼・小・中学校の適正配置に関する計画を策定している。幼保一元化も検討課題である。
- ・ 教育ビジョンとして「地域の子どもは地域で育てる」ことを掲げ、「臼杵っこ」を育てることを目指している。
- ・ 「教育向上支援ボランティア」システムを導入し、教員 OB や主婦、大学生など地元の方に協力を募っている。事例として、小学生を対象に「臼杵山内流泳法」の実技教室を開いた。
- ・ 中学校では部活動が重要であるが、5 年間で 11 の部が廃止された。学校の人材確保が難しくなっている。部活動の支援策として、総合型地域スポーツクラブの検討を進めている。
- ・ 市内の高校と小・中学校高の連携により、地域の学校を育てることを目指していく。

3. 分科会

(1) 第一分科会 地域の教育力を考える～「郷育」

コーディネーター：豊田寛三（大分大学教育福祉科学部教授）

- ・ 臼杵を学ぶ…臼杵の理解を深め、臼杵への愛着を高める。豊かな「原風景」を形成してもらう。臼杵で学ぶ…臼杵の伝統、人的資源を活用する。恵まれた「原体験」を形成してもらう。
- ・ 臼杵ミワリークラブでは、「臼杵っこ」に伝えたい三つの「伝」を实践。 伝統…祇園祭、 伝承…地域のお年寄りから聞きだした民話、妖怪話、 伝記…臼杵の偉人のカードバトル
- ・ 大分県建築士会は、「大分こども大工道場臼杵塾」を実施、まちづくりとものづくりの伝統と文化を守り、伝える。
- ・ 下ノ江小学校区の取り組みを 4 つ。 朝風学級…夏休み中の子ども達と地域出身の大学生の交流。 国際交流…造船技術を学ぶ海外研修生との交流。 すすかけ祭り…夏の夜の日本のふるさとを味わう。 地域ふれあいセンターを拠点に、4 つの委員会が取り組んでいる。
- ・ 地域の教育について、どれくらい認識があるのか、そのために何をしていくべきなのか。臼杵でも連携が難しいという。今から仕掛けをする必要がある。人と人との結びつきが重要である。

(2) 第二分科会 「学校」「家庭」「地域」の連携・協力による学力向上を考える～「協育」

コーディネーター：神足博美（大分合同新聞社編集局次長）

- ・ 学校、家庭、地域の協力・連携が必要であるが、それをどうしたら実現できるか。最初に学力の多様性が指摘された。例えば、高校からみると受験であったり、社会に出て生きていける力、などである。「ゆとり教

育」が競争しなくてもよいという雰囲気を作っているという意見もあった。

- ・ 確かな学力として論を進めていった。社会の変化、地域の変化、さらに家庭の変化が指摘された。母親が仕事に出ているので、学校行事に出られない状況になっている。地域と家庭と学校の連携は、地域再生の問題である。人が臼杵に住み続けられなければ、学校も活力が出ない。
- ・ コミュニティスクールや学校評価制度などは押し着せの制度。教育再生の道は、住民が自ら探さなければならぬ。三位一体の教育システムとして、「臼杵方式」を作っていくことを提案したい。
- ・ そのために必要なのが行政の力である。地域と家庭と学校を結びつけることができるのは行政しかないのではないかと。予算、学校施設、自治会などを活用した実践を期待したい。
- ・ 校長の権限を高めること、学校の裁量権を高めることも提案された。
- ・ 外から変えることも必要だが、内から変えることがもっと必要であるという結論である。

(3) 第三分科会 響きあう心の教育～「響育」

コーディネーター：佐藤敬子（大分県教育センター - 教育相談部部長）

- ・ 子どもはどこかで大人の期待に沿うように生きている。しかし、大人が子どもの手本となる活動をしているわけではない。それでは子どもの心に響かないだろう。
- ・ 人には絶対的な善がある。「お父さんもお母さんも僕を信じてくれない」と子どもが言っている。親が子どもを信じないでどうするのか。どんな子どもにも、魂の中に素晴らしい神がいる。対話する大人側が優しくなることが大切だ。育てるということは自分の持つ人間性が問われること。理屈で教育は出来ない。感動と涙が必要である。
- ・ 家庭や学校や地域が連携というが、何で繋げるかということ、感謝の気持ちではないか。保護者が先生に感謝し、子どもが親に感謝し、大人に感謝する。お互いが信頼関係を結ぶことで、生きた連携が出来上がる。
- ・ 子どもの自尊心がなくなっている。失敗から学ぶことは多い。失敗が許される社会であるべきだ。
- ・ 子ども達に、自分が期待される存在であることを、メールでなく言葉で伝えることが重要である。

4. 全体討論

田中栄治（地域交流センター代表）

- ・ 集まった方の考えの傾向を確認したいので、会場に聞きたい。本当にやらなければならないことを進めるにあたって、誰に期待したいか？ 教師・校長にもっと期待したい・・・10人、 行政に期待したい・・・数名、 地域の力で解決すべき・・・50～60人、 学校と行政の連携・・・50人

鈴木望（磐田市市長）

- ・ 地域コミュニティの再生が教育も、それ以外のことについても重要な結論ではないか。危機感があるから一生懸命に取り組む、地域が子どもを育てることにつながると思う。
- ・ 磐田市は東海道五十三次の宿場町で企業が集積するベルト地帯、人口が175,000人で増えている状況。臼杵とは状況が違うが、同じようなことに悩んでいる。それは、地域コミュニティが崩壊しつつあることに行き着くのではないかと考えている。
- ・ バーチャルの情報が氾濫する中で、子どもの将来、国の将来が心配である。子どもに健全な常識を教えるには地域コミュニティの中でしか育めない。
- ・ どうしたら地域コミュニティが再生するのが最も重要な課題だと考えている。

布村幸彦（文部科学省大臣官房審議官）

- ・ 道徳教育家庭や地域の協力が頂きたい。そのためには、学校が今どう取り組んでいる状況を開放して、地域と学校が繋がっていければと思う。地域に期待している。
- ・ 道徳では、読本を作った。教材「心のノート」を作った。子どもが道徳で考えてもらいたいということで作った。学校と保護者との架け橋にならないかという期待を込めている。
- ・ 言葉と体験を次の指導要領に入れていく。学校の先生の数がかぎられている。地域の専門性を持った方が協力できるような弾力的な対応が出来るといいと思っている。親父の会など、自分も楽しみながら子どもと接するような会の動きが出てきた。いい事例を全国に発信したい。

穂坂邦夫（前志木市長）

- ・ 現場が一番大事だ。それは学校である。そのためには、学校現場が力を発揮できるような状況・システムを作る必要がある。

- ・分かりやすく言うと、本社が文部科学省だとすれば、支社が都道府県、営業所が市町村、現場が学校となるが、現場には裁量権がない。しかも本社や支社が別会社。これでは現場は動けない。
- ・現場がしっかりした上で、現場を支える家庭や地域、行政が一体となるという関係が重要である。

田中栄治（地域交流センター代表）

- ・学校現場が頑張っていると思うかどうかを質問したい。現場は十分力を発揮していると思う・・・数人、まだまだであると思う・・・100人以上

小野信也（衆議院議員）

- ・私の信条のひとつとして、「偉大な仕事は夢で始まり、情熱で持続させられ、責任感で成就する」という言葉がある。
- ・日本を見ると、耐震偽造事件や子どもの事件、金融疑惑など、さまざまな事件がおこっている。人間の心が壊れている状況で何ができるか、それは教育の力しかないと思う。次の時代に夢を持つならば、もっと情熱を注ぎ、教育問題に取り組んでいることが重要である。
- ・地域社会が健全に運営されていれば、学校の教育力はそれほど問題にしなくてもいいかもしれない。家庭の教育力がなくなっている場合は、学校しかない。学校には無限の責任があると思っている。地域社会にも働きかけて健全な子どもを育てることが、学校の役割であるべき。家庭に問題があれば、そこにも指導力を発揮することが学校の役割だと思う。
- ・文部科学省は学校内だけではなく、国民全体を育てる役目があると考えている。もっと国民教育という視点を持って、取り組んでいく必要があると思う。
- ・教師は社会に向かって語る存在でいい。子どもを健全に育むことが求められる職業であれば、特に校長は学校が地域社会に対してどんどん発言するべきである。地域社会に対して学校がどういう存在であるか、月に1回は自らの教育論、人間論を地域に語りかける会を持つてはどうか。地域と学校が理解しあうことになる。
- ・教育者が立ち上がらなければならない時期に来ている。100人に1人が学校の先生。この人たちが社会を方向付けていくと、世の中がいい方向に動くだろう。
- ・教育は人格の完成を目指すという言葉が出ているが、であれば、指導する教員が人格の完成を目指す人でなければならない。

穂坂邦夫（前志木市長）

- ・気持ちは分かるが、システムを作ってあげないと動かない。条件整備した上で、頑張っていこうという話にならないと進まない。

会場

- ・学校の現場は頑張っていると思う。24時間働くわけには行かない。

会場

- ・先生の負荷は大きい。父親としていろいろな先生と会ってきたが、がんばっている先生もいれば、もっと頑張りたいという先生もいる。子どもは教育を受ける権利があるので、それに応える教師であって欲しい。

神足博美（大分合同新聞社編集局次長）

- ・戦後60年、もっとも変わっていないのが学校制度ではないのか。校長、教頭、あとは教員。新任もベテランも同じ先生。新しいシステムを考えていいのではないのか。
- ・学校の先生がいろいろなことを抱えている。テストも一人一人作っているのだから、誰かが手伝うことで教える時間を増やすことができるのではないのか。

吉本幸司（津久見市長）

- ・市長になって2年になる。それ以前にも教育委員やPTAなどをしてきたが、教育の悩みはいまだに解決していない。
- ・先生をどうするかという議論の前に、親が変わらなければならないと思う。行政として親を育てること、関心を持たない親をどう引っ張り出すかが課題だ。
- ・子どもには、ものを教えるというより興味・関心を持たせることが大切。関心を持てば自分から勉強するよ

うになる。先生方にはもっと子どもと一緒に遊んで欲しい。

鈴木望（磐田市長）

- ・地元では言えない話だが、保護者からの要望で多いのは、あの先生をどこかに変えてくれというもので、切実な問題である。保護者にも甘えがあるし、学校に対する幻想があるのではないか。
- ・学校の先生に要求すべきは学力の向上であり、それ以外は家庭や地域に責任をもって取り組んでもらうようにしたい。それができないのであれば、教育委員会制度を変えて、もっと首長が教育についても発言できるようにする必要があると思う。

目黒威徳（高野町教育長）

- ・高野山でも教育改革リレーフォーラムを行うが、高野山では宗教について考える予定である。宗教と教育について考える機会を設けたい。
- ・アメリカに行ったとき、ホームステイして教会に連れて行かれたが、私のことを祈ってもらった経験がある。そのとき、涙が止まらなかった。学校と教会でしっかり教えている。

笠輪春彦（長岡市教育長）

- ・教育は金がかかる。文部科学省にもっと予算をたくさん取ってもらいたい。
- ・教育長には金の権限がない。首長に理解してもらわなければならない。
- ・地域力や学校力をつけるにも財政支援が必要である。長岡市では伝統・芸術・文化・スポーツ活動に対して、ささやかではあるが3年継続して助成金を出している。また、学校長にも自由な奨励金を出している。

宮本一頼（日置市立土橋中学校校長）

- ・日置の宮路市長は、校長会や教頭会にも参加して、我々のそばに座ってくれる。そのことはとても心強いことである。
- ・いちばん困っているのは母親である。一人で苦労している母親の悩みを、できるだけ聞くようにしている。母親をどう助けるかも学校の仕事ではないかと思う。

後藤國利（臼杵市長）

- ・本音までは出てこなかったが、これを機に仕切り直しをして、真剣に教育について考え、取り組まなければいけない。これからは経済ではない教育の時代、物質ではなく心の豊かさを考えたい。

布村幸彦（文部科学省大臣官房審議官）

- ・宗教と教育は大きなテーマである。高野山で宗教が教育に生かせていないとしたら問題である。地域の教育力を考えて行きたい。
- ・アンケートによると、保護者が学校へ期待するいちばん大きなことは、教科の充実と学力向上、次が人間関係、3番目が自ら学ぶ意欲、という結果である。学校が家庭へ要望することは、善悪の判断と基本的な生活習慣となっている。共通理解はされているので、これから実際の動きにどうつなげていくかが課題である。
- ・早寝早起き朝ごはんを、食育とともに大きなテーマにしていきたい。
- ・行政は現場を知らないので学校に多大な期待や要望をするという意見もいただくが、世の中の学校に対する期待が強いので、先生にもっと頑張っていただけのような支援を考えて行きたい。
- ・教員の勤務実態を調べて、頑張っている先生には報奨が出るような、メリハリをつける仕組みを考えて行きたい。

穂坂邦夫（前志木市長）

- ・地域はいちばん大事だという意見であるが、地方交付税は少なくなるし、地方分権は少しも進んでいないのではないかと。何が変わったのか分からない。国には、一層の努力をお願いしたい。
- ・臼杵市でも市費負担の教員を採用しているという報告があった。志木市は財政力がある方だが、それでも教員の市費採用は大変なことであった。臼杵市の努力は大変なものだと評価したい。
- ・志木市は8校しかないのですが、校長裁量の予算を300万円ずつ付けたところ、すべての学校が臨時職員の採用に充てた。それほど学校現場は人手が足りていない。もっときちんと仕組みを直した上で、実態面から見た教育改革を文科省に期待したい。

小野信也（衆議院議員）

- ・自作の短歌を紹介する。「坂の上、遠く輝く白き雲、見つめつ進む足下の一步」。明治の心意気を歌ったものである。
- ・理想を語る人、その理想に向かって挑戦する人が教育者だと思う。理想精神を語らない先生に魅力があると言えるのか。確かに40人の子どもをすべて面倒みるのは大変なことである。しかし、無理とは知りつつも、理想精神を持って一歩ずつ歩むことが重要であると思う。

鈴木望（磐田市長）

- ・磐田市でも市費負担の教員を採用して、特区制度で35人学級を行っている。始めてみると「子どもが少なくなっているから教員の雇用の場を増やしているだけ」という揶揄が多く聞かれる。我々としては、教師としての職分、本来の仕事に邁進してもらうことを期待している。
- ・学校統廃合の話があったが、学校は地域の中心・核であり、学校がなくなったときの地域の問題は首長として切実な問題である。確かに財政のこともあるが、今からは地域コミュニティの核として学校の存在意義を考え、存続の道を探ることが必要になってくると思う。

田中栄治（地域交流センター代表）

- ・ぜひ臼杵方式の確立を期待したい。文部科学省の新教育システム開発プログラムで、九州でも臼杵市と日置市と、福岡県の古賀市の合同で、教員と地域の方と行政でチームを組んで、ていねいな議論をする予定である。今日の議論をつなげて行きたい。

後藤國利（臼杵市長）

- ・ご参加の皆さんに感謝申し上げます。みなさんの熱い心からいろいろな意見をいただいた。ここから臼杵の教育が歩みだすように感じている。